

自然にやさしい川づくり事例

前業務部 主事 照井 治子

国内外を問わず観光客が一年中ひきもきらずに訪れ、また夏目漱石や森鷗外、林扶美子に三島由紀夫など数多くの作家たちによって描かれてきた街、京都。それほどまでに人を魅了する京都の魅力とは何か。京都盆地を囲む山々の山容とその谷間から流れる清流、そして街のあちこちに点在する2,000余りの寺や神社。

今日大都市としての賑わいをみせながら同時に多数の国宝級の文化財も保存している国際観光都市京都は、その素晴らしい風景を保持してこそ、なのである。

その昔、鴨川の土手には芝居小屋が出て大道芸人たちが人々を楽しませ、夜には夜店が並んだ。これはいまの『南座』に残されている。

そして今では京都を訪れる多くの観光客は夏の夜には京名物、鴨川の“床”で京料理を味わう。ふと目をやると遠くに東山が見え、どこからか三味線の音が聞こえてくる。

そんな風流な光景が四条河原町あたりの鴨川辺りで見られるのだ。

この鴨川の川底を見ると石が敷き詰められているのがわかる。これは以前市内を縦横に走っていた市電の敷石を使ったもので、この石にコケが付きそれが、ここ10年ほどで綺麗になった鴨川に棲むアユの餌になっている。

また、鴨川をはさんで西と東では街の様子ががらりと変わっているのも面白い。

西の木町通りは学生や若者であふれかえり、安くて楽しめる店が軒を連ねている。

一方、東は祇園の舞子さんがそぞろ歩き、高級なお茶屋や年配の姿が多く、京の一般庶民でも普段はとくに用は無いという特別地区（！）なのである。

しかしそんな鴨川も千年の昔から度重なる氾濫を続けて

いた。

そして昭和10年6月の大水害の後になって本格的な改修工事が行われることになった。

その時の京都府は^{※1}『東山ノ山紫ニ対シ河川ノ水明ヲ唄ハレタル古都千年ノ名川』である鴨川の風致維持の考慮を指摘した。そして^{※2}『風光明媚ニシテ市内ヲ貫流セル』鴨川は『……京都ノ優雅ナル情景を保持シツツアリ』と京都の風致上において極めて重要な位置を占めているのである。

国際観光都市の中心を流れる川である以上、鴨川の改修工事は国家規模の大事業であったのだろう。三条～七条間の市電の地下移設や琵琶湖疎水を管路にしてその上に都市計画道路を作ろうとする案など、鴨川だけではなく京都の街全体の改造を目指していたのである。

現在しきりに景観の重要性が叫ばれているが、戦前に行われたこの鴨川の改修工事がこのように時代を先取りした考え方をもって行われていたのは驚くべき事である。

しかし、^{※3}「京都のみならず機械化される以前の土木技術者は、周辺の風致との調和の必要性と、それを設計へ反映させる能力を当然のこととしてもっていた」のだとするとやはり戦後の産業の発達は良い面ばかりとは言えないのかもしれない。

今年は建都1200年祭に沸く京都の街。

あちこちから聞こえる祭りの音に耳を澄まし、夕闇に浮かぶ火祭りに目をみはり、涼やかな川風を感じながら京都の街をのんびりと歩いてみるのも、また格別だろう。

日本人の心のふるさと京都には、やはり鴨の流れはなくてはならないものだった。

*「※1～※3」 島谷幸宏「水辺空間の魅力と創造」より引用



鴨川（団栗橋下流 下・方）



鴨川（五条大橋から上・方）